

## 連載 41 阿部豊『あの旗を撃て』（1944 年）への道のり

阿部豊（1895 - 1977）は、宮城県に生まれ、旧制中学を中退してアメリカに渡った。早川雪洲（1886 - 1973）の知遇を得て、俳優ジャック・アベとしてデビューし、映画演出術をウェスタンの父ことトーマス・H・インス（Thomas H. Ince 1882 - 1924）、『第七天国』で知られるフランク・ボーゼイジ（Frank Borzage 1893 - 1961）に学んだ。

帰国して 1925 年日活大將軍撮影所に入社し、翌 26 年『足にさはった女』であたりをとった。

春日井忍は、「『足にさはった女』を見た時、私は嬉しかった。日本映画にもかうしたものが出るのを見ることは、凡ての映画愛好者にとつてたまらない喜びであらうと思ふ」（『足にさはった女から — 附原田虹二君に答ふ』『キネマ旬報』1927 年 1 月 21 日号）と、称賛した。

阿部豊は日本人離れした、夢見るモダニストだった。

阿部氏のものにあつては、テムポは恐ろしく、時代の歩調に合して速くなつてゐる、生活は極度に時には少々道化染みて迄、新らしい。此処では色模様の代りに、足どり軽い口笛と共にする行進曲が奏せられる。（内田岐三雄「主要日本映画批評 彼を繞る五人の女」『キネマ旬報』1927 年 4 月 21 日号）

スピード感とナンセンス・ユーモアが持ち味だった



『足にさはった女』（1926 年）



『あの旗を撃て』（1944 年）

のである。

その年末には、陪審員制度普及のため司法省の後援を受けた宣伝映画『屍は語らず』を手がけた。「宣伝映画以外に好個の探偵趣味映画」と評した芳原薫は、「阿部氏は此の映画に彼の持つ好ましい味を盛つてゐる。全体に亘るエキゾチック味、綺麗なそして器用な手法」（『キネマ旬報』1928 年 1 月 1 日号）と、指摘している。

その阿部豊が、戦時中には国策映画、戦意高揚映画を撮った。

1942 年、日本軍は 4 月のフィリピン、バターン半島における米軍降伏、5 月のコレヒドール攻略によって、東南アジア全域を軍事占領下に置くことになる。バターンでは捕虜の移動で多くの犠牲者を出した「バターン死の行進」が強行された。そのコレヒドール陥落を描き、日本兵とフィリピン人の友情を描いたのが『あの旗を撃て』（1944 年）である。

フィリピンでは、先行する宗主国のスペイン文化、そしてアメリカ文化の影響力が大きかった。そして映画産業が盛んであった。

「比島に上陸して先づ驚くのは映画館の多いことである。どんな村落に行つても必ず教会と小学校と映画館は申合せたやうにある」「比島の俳優の芸術と製作技術は相当なものである」（鈴木壽雅「宣伝工作を中心とした比島映画事情」『国際文化』1943 年 11 月号）と、戦時の文化宣伝の見地からは報告されている。

東宝が阿部豊監督、大河内傳次郎、藤田進、河津清

三郎等の俳優陣を出し、フィリピン側からは共同監督ヘラルド・デ・レオン監督と達者な子役たち、スター俳優が出た。『あの旗を撃て』は、戦時下唯一の日本フィリピン合作映画となった。製作には困難が伴ったのではないかと推測される。完成は遅れ、戦争末期までずれ込んだ。

「この映画は日本とフィリピンの共同製作であったが、日本人を解放者やフィリピン人の兄弟として描き、アメリカ人を宣伝活動によってフィリピン人を洗脳する二心ある敵として描いた。」「日本人は「あの旗を撃て」撮影の際、アメリカ人が制圧されたことを示そうとしたが、この場合もそれは逆効果であった。フィリピン人はかえってアメリカ人戦争捕虜に親愛の情を寄せた。」「西洋文化は浅薄で、物質主義的で、個

人主義的であるという主張は正しかったのかもしれない。しかしそれを信じた人はほとんどいなかった。」と、リカルド・T・ホセ（「たわめども折れず——大戦期フィリピン・ナショナリズムと日本の文化政策」岩波講座『近代日本と植民地』1993年）は述べる。

それは正当な指摘だろう。ただし、『あの旗を撃て』がまったくハリウッド的なカメラワークと文法、ドラマτουργーによってつくられていることを見落としてはならない。現代の観客としては、戦時の他の国策映画とは異なるそのドラマの細部に、驚かすにはいられない。阿部豊に染みついたモダニズム、アメリカニズムが、どこかで大東亜共栄圏イデオロギーを裏切るのである。